

平成 23 年度 鳥取県バスケットボール協会審判講習会 報告書

- 1、日時：平成 23 年 6 月 11 日（土）、12 日（日）
- 2、場所：鳥取県立米子南高等学校 教室及び体育館
- 3、参加人数：1 日目 40 名、2 日目 30 名
- 4、講師：島田 剛次 氏
- 5、内容

6 月 11 日（土）

○ 講義（10：10～11：30）

【はじめに】

より良い審判員になるためには、目標があることが大事。「A 級、AA 級になること」を目標にし、そのために努力することが大切である。審判をすることによって、指導しているチームに還元できる。

【指導重点項目】 重要な順

1. 公平性を伴う判定の一貫性
 - ・ゲームによって、その人の今の状況によって違うもの。
 - ・ゲームにマッチした基準にするために、判定に幅を持たせる事、チャンネルを持つことが大切である。
 - ・求められているものは、いつも **good judge** である。
 - ・自分の今の判定基準を 40 分間示し続けること、そして自分がどれだけバスケットに時間を費やしているかが問われる。
2. 規則・マニュアルの正しい理解と適応（改正規則の把握）
 - ・ルールを知っていることは、ルールを理解していることにはつながらない。
3. 相手審判やテーブル・オフィシャルズ（TO）との連携意識の向上
4. ゲームのスムーズな進行・重要な時間帯への対応
 - ・「接戦の第 4 ピリオド、残り 2 分は審判にミスは許されない。」
 - ・ゲームの流れを止めない。（ **Don't stop the music!!** ）
 - ・**clean** なゲーム、よりタフなゲームを進行するためにゲームの始めに基準を示す。タフとラフは違う。
 - ・**feel the game** ちょっとしたことからヒントを得る。質の悪い事をしそう、キープレーヤーだ、ベンチの声を耳に入れてみる。「情報は山ほどある」それに気付くかどうか。
 - ・ランレポートラン シンプルに、きちんとストップして。
「時計が止まっている時ほどレフェリーに注目される時間はない。」

5. 審判員としてのコンディショニングの自己管理意識の向上
 - ・体力、走力、メンタルのコントロール、技術の準備、担当するゲームのチーム情報を得る。
 - ・人が自信を持ってない時は見通しが見つからない時。
6. 技術の理解とゲーム運営
 - ・イリーガル・ユース・オブハンズの正確な判断。
 - ・アンスポーツマンライク・ファウルの規則にしたがった正確な判断
 - ・ベンチ（コーチ、Aコーチ、交代要員、チーム関係者）、およびプレイヤーの管理
 - ・タイムアウト後のスムーズなゲーム再開
 - ・そのほかの場合における審判員としての毅然とした態度
 - 「罪なきは罰せず」「ノーコールで良いコール」
 - 「質の悪いものはかすってもファウル」
7. 個々のプレイの見極め
 - ・スクリーン・プレイの見極め
 - ・アクト・オブ・シューティングの見極め
 - ・トラヴェリングの未極め
8. ショット・クロックの把握
9. 服装や身なりを含むプレゼンテーション

○ 実技講習（13：00～13：30）

[3列に並び少し走ってストップして笛を吹く練習]

- ・3Sと手をまっすぐあげることに気をつけて笛を吹く
- ・笛を吹いた後、笛をくわえたままレポートしにいかない。

[リードからトレールへ、トレールからリードへ走って笛を吹く練習]

- ・シュート後のトレールのペネトレイトとリードのペネトレイト。
- ・きちんと止まって判定。
- ・ランレポートラン。

○ 講習ゲーム（13:30～17:00）

高校生の男女のゲームを用いて講習を行った。

6月12日（日）

○ 講習ゲーム（9:00～12:30）

昨日に引き続き、高校生の男女のゲームを用いて講習を行った。

6、講習会の様子



7、最後に

初日の大変わかりやすい講義から始まり、実技講習では、はりきりすぎてつまづいて 1 回転してしまう受講生もおられ、温かい雰囲気講習が行われました。講習ゲームでは、島田先生自ら、ゲームを止めて指導して下さいたり、また、実際にゲームを吹いている審判の横について、細かく指導して下さいたりと、受講生にとってはこれ以上ない環境で講習が受けられました。今まで気にもしていなかったことを気付かせてもらい、また、普段不安に思っていたことに対して考え方が固まり自信が持てるようになりました。島田先生には大変感謝しております。ありがとうございました。

今回、数 10 年ぶりに日本協会から講師をお招きして講習会を実施しました。参加者は 2 日間合わせて 70 名でした。今回の講習会で学んだことを、今後の審判活動に活かし、鳥取県の審判員としてより一層、資質向上・技術向上を図っていただきたいと思います。

(文責 神田 竜馬)